



Title	風しんワクチン
Author(s)	大西, 直臣
Citation	makoto. 1980, 31, p. 5-5
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86100
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

風しんワクチン

(財)阪大微研学術課

大西直臣

風しんは、古くから「はしか」に似た症状を呈する病気で、特有の発しん、リンパ節の腫脹、軽い発熱などを主徴とする風しんウイルスによる急性の発しん性感染症です。その流行は通常春から初夏にかけて、乳幼児、学童を中心としてみられ、三日はしかの別名の通り、感染しても軽く経過する。しかし、妊娠初期の妊婦が罹患すると、いわゆる先天性風疹症候群と呼ばれる先天性異常児の生れ易いことが明らかになって以来、にわかには、こうした先天性異常発生を防止するため、妊娠前に免疫を与えておくことが重要な問題となってきた。因みに、一九六三年から一九六四年の米国における流行では二〇、〇〇〇人以上、一九六四年から一九六五年の沖縄での流行では三〇〇人以上の先天性風疹症候群児の発生をみている。その異常は、難聴、心臓疾患、眼疾患が最も多い。又風しんに罹患したときの妊娠月数と異常発生率をみると、妊娠

初期(三ヶ月)が非常に高く、4ヶ月以後は減少していることが分った。

最近、風しんは六年から十年の間隔で流行しており、昭和三十四年、四十年、五十年の年からそれぞれ二一三年にわたって全国的な大流行が見られた。この為、風しんを予防し、風しんによる先天性異常を防止するにはワクチンの使用が最も有効であることから、その開発が進められた。米国では、一九六九年から実用化され数千万人の人に使用されている。

わが国に於る風しんワクチンの開発は欧米に比べてやや遅れをとりましたが、結果的には優秀なワクチンが開発された。一九七六年にはワクチン製造及び検定基準が決定し、翌年から一般に使用される様になった。さらに全国的流行もあって、予防接種法改正に際して、一九七七年秋から中学生女子を対象に定期接種が行われる様になった事は周知のとおりです。私も阪

大微研グループもワクチン開発に参画し、風しんウイルスをワズラ胎児細胞に順化させた世界独自の生ワクチンを開発しました。現在、わが国には4種類のワクチンがあり、他の3種類はいずれも幼若ウサギ腎細胞が製造に用いられています。

風しんワクチンは、性、年齢に関係なく使用することが出来るが、特に年齢に従って区分されている。

一、中学生の女子(定期接種)
結婚前に風しんに対する免疫を与えておくことを目的とし、政令では十三才以上五才と定められているが、多くは中学三年生の女子に接種されている。今後状況が許せば中学一年、二年で行っても良い。

二、成人女子
風しん罹患の既往がない成人に対して風しん感染予防の為接種する。昭和五十三年度流行予測事業報告によると、わが国に於る現在の

20才以上の成人抗体保有率は80%であるがそれ以下の十五才以下の人はかなり低い事が指摘されており、定期接種の対象外であるが、任意接種として積極的な免疫を得る必要がある。

三、幼児及び学童
風しんの感染予防及び集団発生を防ぐ目的で行う。このことは、流行の母体に広くワクチン接種することにより、大流行を阻止し、ひいては成人の感染機会をおさえる。

風しんワクチン使用上の注意としては、生ワクチンに共通する注意を守る必要がある。
《特に成人女子の接種》
妊娠中の婦人には絶対に接種しない様にしてください。もし妊娠中にワクチンが接種されるとワクチンウイルスが胎児に感染し異常を起す可能性は否定出来ない為、接種するときは、妊娠していない条件とともに、接種後二ヶ月間は避妊することが必要です。この為産科医の指導の下で個別的に接種されることが望ま

しい。

風しんワクチン接種後の副反応は、小児では殆ど認められず現行のワクチンの中で最も副反応の少ないワクチンです。成人の場合、まれに発疹、リンパ節の腫脹、関節痛などの症状を見ることがありますが、頻度は一%以下で一過性のものなのですぐ消失します。

以上述べた様に副反応が少く、効果の高い風しんワクチンを定期接種、任意接種を問わず接種することにより風疹症候群児の発生を防止するとともに、将来、はしか、おたふくかぜのワクチンとの混合化に伴い、乳幼児への接種が拡大されることにより、風しんの流行も阻止出来るものと考えます。

